

研究主題「豊かに感じ、思いを伝える音楽表現をするための指導の工夫

―場面に応じた適切な言語活動を取り入れて―

東京都教職員研修センター研修部教育開発課

八丈町立富士中学校 主任教諭 宮崎 裕子

第1 研究のねらい

1 音楽を通して豊かな心を育てる

音楽科の目標の中には「豊かな情操を養う」という言葉があり、「一人一人の豊かな心を育てる」という重要な意味がある」と中学校学習指導要領解説音楽編（平成20年9月）で述べられている。また、学習指導要領の理念“「生きる力」を育む”の、「生きる力」の一つとして、感動する心などの豊かな人間性が挙げられている。これらを踏まえ、音楽の感動を通して生徒の豊かな心を育てていきたいと考えた。そのためには「音楽を豊かに感じ取る力」と「思いを伝える音楽表現をする力」を高めることが重要であり、二つの力の育成を通して、生徒は音楽活動の喜びや感動を感じ、豊かな心が育つのではないかと考えた。

2 言語活動を通して「音楽を豊かに感じ取る力」と「思いを伝える音楽表現をする力」を育てる

「音楽を豊かに感じ取る力」と「思いを伝える音楽表現をする力」を高めるために、効果的な指導の工夫について検討した。音楽から感じ取ったことを伝え合うことで、様々な感じ取り方があることに気付いたり、仲間と話し合っって音楽表現を創意工夫したりするなど、言語活動は効果的な手だての一つではないかと考えられる。しかし、「特定の課題に関する調査（音楽）調査結果報告書（平成22年7月国立教育政策研究所）」では、言語活動を適切に取り入れた指導の工夫が十分であるとは言えない現状が示され、改善する必要性が指摘されている。

そこで、「音楽を豊かに感じ取る力」と「思いを伝える音楽表現をする力」を高めるために、「授業のどの場面でどのような言語活動を取り入れ、どのような指導の工夫を行う必要があるか追究すること」を研究のねらいとし、研究主題を設定した。

第2 研究の内容と方法

1 研究の仮説

場面に応じて適切な言語活動を取り入れ、指導の工夫を行えば、豊かに感じ、思いを伝える音楽表現をする力を高めることができるだろう。

2 基礎研究

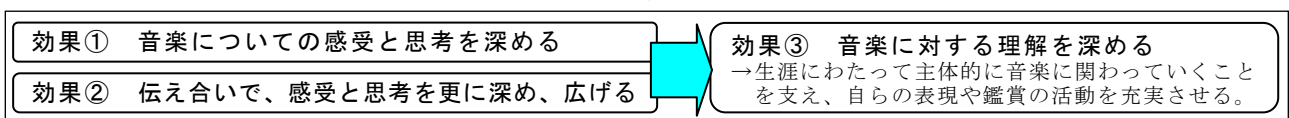
(1) 本研究における音楽科における言語活動の捉え

一般的な言語活動「聞く」「読む」「話す」「書く」に加え、「音楽に関する用語や記号などを理解し、用いること」とした。

(2) 音楽科における「言語活動を取り入れると効果的な場面」の設定

中学校学習指導要領解説音楽編（平成20年9月）等の文献を基に、三つの「音楽科における言語活動を取り入れる効果」（図1）を考えた。

図1 音楽科における言語活動を取り入れる効果



効果③については、効果①②の活動を繰り返すことで成り立つ効果なので、本研究では効果①②について研究することにした。そして各効果を、歌唱、器楽などの分野別に当てはめ、「音楽科における、言語活動を取り入れると効果的な9場面」として一覧表にした（表1）。

表1 音楽科における、言語活動を取り入れると効果的な9場面

効果 領域・分野		効果① 音楽についての感受と思考を深める	効果② 伝え合いで、感受と思考を更に深め、広げる
表現	歌唱	A 音楽から感じ取ったことやイメージを、音楽を形づくっている要素を基に解釈、説明する場面	F 表現意図を伝え合い、音楽表現を仲間と練り上げていく場面
	器楽	B 表現したい思いや意図をもつ場面	G 自分たちの表現を聴き合い、より良い工夫につなげていく場面
	創作	C 創作活動の源となるイメージをもつ場面	H 音のつながり方などの工夫や表現意図を伝え合って、創作活動をする場面
鑑賞		D 音楽によって喚起された自己のイメージや感情などを、音楽を形づくっている要素を基に解釈、説明する場面 E 音楽の内容を価値あるものとして自らの感性によって評価（批評）する場面	I 他者の感じ方や解釈も参考にして、より深く音楽を鑑賞する場面

3 調査研究

平成23年7月に都内公立中学校音楽科教員47名を対象に、授業における言語活動について調査を行った結果、様々な難しさを感じていることが分かった。「生徒は、話し合いが活発にできない」と思う教員は62%、「自分の感じたことや思いを言葉にするのに、苦手意識をもっている生徒が多い」と思う教員は68%であった。自由記述では、以下のような意見を得た。

- ・ 日頃の授業から、音楽表現を言葉で表す場合の言語を教えていかななくてはならないと考えている。そして、鑑賞と表現は一体となって指導し、言語についても鑑賞と表現両面に通じる教え方をしていかなければ、と思っている。
- ・ 入学当初から、自分の感じたことなどを発表し、互いの意見を聞き合ったり、表現の工夫をみんなで話し合い高め合おうとしたりする活動が、もっと必要であると感じている。活発な授業をするためにも言語活動は大切だと思う。

教員は、言語活動によって生徒の主体的な表現や鑑賞の活動が充実すると考え、難しさを感じながらも言語活動を取り入れた指導の工夫に取り組もうとしていることが分かった。

4 開発研究

(1) 「音楽の言葉集」

音楽科の授業で言語を用いて思考したり話し合ったりする際には、日常私たちが使っている言語のほかに「音楽を形づくっている要素を表す言葉」や「音楽の記号や用語」、そして「音楽から感じ取ったことを表すための感性・情緒に関わる言葉」が必要になってくると考えた。そこでこれらの言葉を、中学校学習指導要領（平成20年3月告示）の中の共通事項で述べられている諸要素ごとに整理して「音楽の言葉集」（表2）を作成した。これは、指導者が言語活動を取り入れた授業を考えたり、生徒に対し言語活動で活用する言葉を提示したりする際の、資料となるよう意図したものである。「音楽を形づくっている要素を表す言葉」と「音楽の記号や用語」を「知覚の言葉」、「音楽から感じ取ったことを表すための感性・情緒に関わる言葉」を「感受の言葉」として示した。

表2 音楽の言葉集（一部抜粋）

共通事項	知覚の言葉	感受の言葉
音色	・ 声の音色（ソプラノ、テノール…） ・ 長唄の声 ・ 民謡の声 ・ 各楽器の音色…	・ 明るい声 ・ 力強い声 ・ 温かい響きの声 ・ 輝かしい音色 ・ 澄んだ音色 ・ 切ない音色…
リズム	・ 拍 ・ 拍子 ・ シンコペーション ・ 2/4拍子 ・ 3/4拍子 ・ 6/8拍子 ・ 間 ・ 拍節的なリズムと拍節でないリズム…	・ (シンコペーション) リズムに意外性が加わる ・ (3/4拍子) 踊るような感じ ・ (6/8拍子) 揺れるような感じ…
速度	・ Andante ・ Moderato ・ Allegro ・ rit. ・ a tempo ・ accel. ・ 序破急…	・ (rit.) だんだんと落ち着く感じ ・ (accel.) だんだんと気持ちが高ぶる感じ…

「感受の言葉」は生徒の実態や発達段階等に応じて様々であるため、表に掲載した言葉は大まかな特質を示すものと考え、指導者が題材等に合わせて適宜補ったり、生徒から出た言葉を加えたりして指導していく必要がある。

(2) 「音楽科における言語活動を取り入れると効果的な場面」ごとの、言語活動の工夫

基礎研究で明らかにした「音楽科における、言語活動を取り入れると効果的な9場面」の各場面において、効果的な指導の工夫について整理し、一覧表にした(表3)。この一覧表は、言語活動を取り入れた授業を計画する際の参考資料として開発した。

表3 音楽科における場面ごとの言語活動の工夫(一部抜粋)

A 表現領域の歌唱・器楽分野において、音楽から感じ取ったことやイメージを、音楽を形づくっている要素を基に解釈、説明する場面
《言語活動を取り入れる際の留意点》 ・漠然と感じ取ったことをはっきりと意識したり、何を感じ取ったか思考したりする道具として言語を用いる。 ・感じ取ったことと、音楽を形づくっている要素とを関連付けて考える道具として言語を用いる。
(歌唱分野において) 歌詞からイメージを膨らませ、言語化する際の工夫
○ 縦書き歌詞の活用(音読、清書) →縦書きで漢字を用いて書かれた歌詞を、読んだり書いたりすることでイメージを膨らませ、そのイメージを言葉にしたり文章にしたりする。
○ イメージのポイントとなる歌詞についての発問 〈例〉このときの作詞者の気持ちはどんなものだろうか。 →歌詞からイメージを膨らませ、そのイメージを言葉にしたり文章にしたりする。

5 検証授業

「音楽の言葉集」と「場面ごとの言語活動の工夫」を活用した、鑑賞と表現(歌唱)の授業を行い、生徒の「音楽を豊かに感じ取る力」や「思いを伝える音楽表現をする力」が高まったかについて検証した。

(1) 鑑賞の検証授業

M. ラヴェル作曲の「ボレロ」を教材に、検証授業を行った(第1学年対象)。

■本授業における場面ごとの言語活動の工夫 ○(表1・場面D)音楽から感じ取ったことを言葉に表しやすいう、多くの「感受の言葉」をヒントとして示す。(=「音楽の言葉集」の活用) ○(表1・場面D)文章を作成しやすいう、文型を決めたり、文章例を示したりする。 ○(表1・場面E)音楽を形づくっている要素と曲想との関わりについて書きやすいうに、記述するポイントを明示したワークシートを作成する。

最初に「様々な楽器で演奏される主題の旋律を聴き、その楽器の音色を感じ取って言葉で表す」学習を行った。その際、感じ取ったことをうまく言葉で表現できないなどの問題を解決する手だてとして、楽器の音色を表す「感受の言葉」を、「音色を表す言葉集」(表4)として生徒に示した。その結果、全員が感じ取った音色について言葉で表すことができた。

表4 音色を表す言葉集

明るい 軽やかな 温かい おどけた 輝いた にぎやかな 楽しげな 澄んだ 繊細な 深い 不安定な 渋い せつない ゆったりした…

表5 フルートの音色を表す言葉についての記述(生徒34人)

言葉集の言葉をそのまま書いた生徒	言葉集の言葉を2つ以上組み合わせで書いた生徒	言葉集の言葉に自分の言葉を付け加えて書いた生徒	自分の言葉のみで書いた生徒
11人	6人	9人	8人

記述内容の内訳(表5)を見ると、言葉集を活用しながらも、自分が感じ取ったことをどのような言葉で表すとよいか、深く考えることができた生徒が多かったと考えられる。

「豊かに感じ、思いを伝える音楽表現をするための指導の工夫
—場面に応じた適切な言語活動を取り入れて—」

次に、「様々な楽器の音色によって生まれる主題の旋律の雰囲気を感じ取り、言葉で表す」学習を行った。前段階で「音色」について記述させスモールステップを踏んでいることや、文章例を示したり、文型をある程度決めたりしたことで、自分の言葉でイメージ豊かに表すことができた生徒が多かった(表6)。一連の授業の流れの中での場面ごとの適切な言語活動の工夫が、「音楽を豊かに感じ取る力」を高めるのに有効であった。

表6 「様々な楽器の音色によって生まれる主題の旋律の雰囲気を感じ取り、言葉で表す」学習で生徒が書いた文章例

	生徒が書いた文章例
フルートの音色による主題A	<ul style="list-style-type: none">・ 鳥がさわやかな優しい風に乗って、ゆっくりと大空を舞っている感じ。・ まだ、みんなが寝ている頃、太陽が出始めた朝のイメージ。
ファゴットの音色による主題B	<ul style="list-style-type: none">・ 海の深い場所で、不安に泳ぐ魚のような感じ。・ 少し大きい動物が向こう側からのそのそ歩いてきて、ゆったりしているイメージ。

(2) 表現(歌唱)の検証授業

混声3部合唱曲「そのままの君で」を教材に、検証授業を行った(第1学年対象)。

■本授業における場面ごとの言語活動の工夫

- (表1・場面A) 歌詞について、自分の体験や思いと関わらせながらイメージを膨らませるワークシートを用いる。
- (表1・場面A) 音楽の特徴を基に「伝える思いの強さ」の変化を考え曲線グラフで表し、「伝える思い」を言葉で表す際の一助とする。
- (表1・場面B) 強弱についての比較を基にして、mfが付けられた最後の1フレーズに込める気持ちを考える。

この授業では、「ずっといい友達でいてほしい」という歌の思いを一番伝えたい部分はどこだろうか、という発問をし、楽譜を分析しながら「伝える思いの強さ」の変化を曲線グラフで表した。その上で、最後の1フレーズを、どんな気持ちを込めて歌ったらよいか考えて、文章で表すことに取り組み(表7)、多くの生徒が自分の考えを書くことができた。

表7 「最後の1フレーズを、どんな気持ちを込めて歌うか」について生徒が書いた文章例

- ・ この部分が、一番の本心だと思う。そんな気持ちで歌う。
- ・ 別れの寂しさを伝える気持ちだと思う。
- ・ 友達を思うせつない気持ち。だから感情を込めて少し声量を落として歌いたい。
- ・ 自分の思いが伝わるように願っている気持ち。または、別れるのが悲しいという気持ちをかみしめているのではないか。
- ・ 君は君のまま、そのままの人でいてほしいと願う気持ちだと思う。

授業後、「相手に気持ちが伝わる歌を歌うことができてよかった」、「最初に歌ったときよりも思いが表現できた曲になった」などの感想を得た。場面ごとの適切な言語活動の工夫は、「思いを伝える音楽表現をする力」を高める一助になったと考えられる。

第3 研究の成果

本研究においては、「言語活動を取り入れると効果的な9場面」を考え、場面ごとの言語活動の工夫を開発した。その工夫を取り入れた授業を行うことを通して、生徒の「音楽を豊かに感じ取る力」と「思いを伝える音楽表現をする力」を高めることができた。

第4 今後の課題

- 器楽と創作においても、生徒の実態に合わせた適切な言語活動を位置付けた学習指導案を作成し、実践して効果を検証する。
- 「音楽科における場面ごとの言語活動の工夫」を取り入れた授業を更に実践し、工夫の有効性について検証する。
- 「音楽科における場面ごとの言語活動の工夫」の開発を更に進める。